

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : **2003-313106**
(43)Date of publication of application : **06.11.2003**

(51)Int.Cl. **A61K 7/00**
A61K 7/48

(21)Application number : **2002-118020** (71)Applicant : **SANTEBEERU:KK**
(22)Date of filing : **19.04.2002** (72)Inventor : **KOBAYASHI HIROSHI**

(54) COSMETIC

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a cosmetic effectively delaying the progress of aging of the skin, effectively preventing oxidation trouble of the skin and well recovering the damaged skin.

SOLUTION: This cosmetic comprises a glycol transfer extract liquid of an olive leaf extract and a rosemary leaf extract in the total amount of 0.1–5.0 wt.% and deep sea water in an amount of 1.0–95.0 wt.% in the total amount of the cosmetic.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination] **14.04.2005**

[Date of sending the examiner's decision of rejection] **11.07.2006**

[Kind of final disposal of application other than the
examiner's decision of rejection or application
converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of
rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision
of rejection]

[Date of extinction of right]

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2003-313106

(P2003-313106A)

(43)公開日 平成15年11月6日 (2003.11.6)

(51)Int.Cl.⁷

A 61 K 7/00

識別記号

F I

テマコト^{*}(参考)

A 61 K 7/00

K 4 C 0 8 3

B

C

7/48

7/48

審査請求 未請求 請求項の数2 O.L (全 11 頁)

(21)出願番号

特願2002-118020(P2002-118020)

(22)出願日

平成14年4月19日 (2002.4.19)

(71)出願人 502141201

株式会社サンテペール

東京都中央区銀座7-13-6

(72)発明者 小林 弘志

東京都中央区銀座7-13-6 株式会社サンテペール内

(74)代理人 100092679

弁理士 橋口 盛之助 (外1名)

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 化粧料

(57)【要約】

【課題】 肌の老化の進行を効果的に遅延させ、かつ肌の酸化トラブルを効果的に防ぐと共に、ダメージを受けた肌を良好に回復させることができる化粧料を提供すること。

【解決手段】 化粧料全量中、オリーブ葉エキスとローズマリー葉エキスとのグリコール移抽液を合計で0.1~5.0重量%、海洋深層水を1.0~95.0重量%含むこと。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 化粧料全量中、オリーブ葉エキスとローズマリー葉エキスとのグリコール移抽液を合計で0.1～5.0重量%、海洋深層水を1.0～95.0重量%含むことを特徴とする化粧料。

【請求項2】 海洋深層水はミネラル分を残して脱塩したものであることを特徴とする請求項1に記載の化粧料。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、抗酸化性に優れた化粧料に関し、特に、ダメージを受けた皮膚等を良好に回復させることができるものならず、皮膚等のダメージを効果的に予防することができる化粧料に関する。

【0002】

【従来の技術】近年、食品や医療の分野で、抗酸化性に優れた化合物や天然物が注目され、健康維持や疾患改善、その他種々の目的で広く使用されている。一方、化粧料の分野においても、抗酸化性物質の効果が注目され始めており、肌の老化の進行を遅延させたり、肌の酸化トラブルを防ぐ等を目的とした研究が進められ、天然物から得られる抗酸化性物質を使用した化粧料が開発され、実用化されているものもある。

【0003】

【発明の目的】本発明は、従来の抗酸化性物質の作用をより一層良好に発現させ、肌の老化の進行を効果的に遅延させ、かつ肌の酸化トラブルを効果的に防ぐと共に、ダメージを受けた肌を良好に回復させることができる化粧料を提供することを目的とする。

【0004】

【発明の概要】本発明の化粧料は、上記目的を達成するために、化粧料全量中、オリーブ葉エキスとローズマリー葉エキスとのグリコール移抽液を合計で0.1～5.0重量%、海洋深層水を1.0～95.0重量%含むことを特徴とする。

【0005】本発明において、オリーブ葉エキスとローズマリー葉エキスとのグリコール移抽液は、N I N A P H A R M社の特許出願PCT/F R 9 3 / 9 6 2 に係る同社製の商品名“ORISOD”（登録商標、以下、

「オリソッド」と記す）をそのまま使用することができる。このオリソッド中、オリーブ葉エキスは、ヒトの肌や毛髪等に対して、免疫力の強化、抗酸化等の作用を発現する。一方、ローズマリー葉エキスは、中枢神経系の機能を亢進して、血液循環の促進と血管壁を強化し、ヒトの肌や毛髪に対して、抗酸化作用と老化防止作用とを発現する。このように、主として抗酸化作用をなすオリーブ葉エキスとローズマリー葉エキスは、オリーブの葉とローズマリーの葉をグリコールで処理して、グリコール中に抽出し、グリコールごと使用される。なお、グリコールは、化粧料に通常使用されるものであって、ヒト

の肌や毛髪に対して、保湿、保護等の作用を有する。

【0006】上記のオリソッドは、化粧料全量中0.1～5.0重量%とする。これ未満であると、上記のオリーブ葉エキスとローズマリー葉エキスの作用を十分に得ることができず、逆にこれよりも多くても、上記のオリーブ葉エキスとローズマリー葉エキスの作用が飽和するため、不経済となる。

【0007】本発明の化粧料では、上記のオリソッドのほかに、海洋深層水を必須成分として配合する。海洋深層水は、一般に深度200メートルより深く太陽光が届かない位置の海水を指し、大気に触れることなく長期間の歳月をかけて地球を回っている海水といわれ、低温で細菌が少なく、また、植物プランクトンが存在しないため、バクテリアによって分解された無機栄養塩などを豊富に含んでいるものである。この海洋深層水には、カルミウムやマグネシウム、ナトリウムなどヒトの細胞の生理作用が必要とする様々なミネラルを豊富に含んでいるため、ヒトの肌に対する保湿剤の保湿効果を助長する作用を発現すると共に、上記のオリソッドの保湿作用や抗酸化作用を助長する作用を発現する。本発明で使用する海洋深層水は、取水した海洋深層水にUV殺菌を施し、電気透析脱塩法により精製したミネラル分を残した脱塩水であり、その量は化粧料全量中1.0～95.0重量%である。これ未満であると十分なミネラルが得られず、逆に多すぎると化粧料として必要な他の成分の配合ができなくなるからである。

【0008】

【発明の実施の形態】本発明の化粧料では、上記のオリソッドと海洋深層水の必須成分の他の化粧剤成分としては、特に限定されるものではなく、例えば、薬事法に規定される育毛剤、浴用剤、薬用化粧品すなわち薬用石鹼、薬用シャンプー、薬用リンス、薬用化粧水・薬用クリーム・薬用乳液、薬用パックなど、及び、薬事法で規定される化粧品すなわち清浄用化粧品類、頭髪用化粧品類、基礎化粧品類、ファンデーション類、浴用化粧品類などに含まれる化粧剤成分を製造する化粧料の形態、性状に応じて適宜用いることができる。

【0009】本発明の化粧料には、通常化粧品に用いられる成分、例えば、植物、動物、魚貝類、微生物由来の抽出物、粉末成分、液体油脂、固体油脂、ロウ、炭化水素、高級脂肪酸、高級アルコール、エステル類、シリコーン、アニオン界面活性剤、カチオン界面活性剤、両性界面活性剤、非イオン界面活性剤、保湿剤、水溶性高分子、増粘剤、被膜剤、紫外線吸収剤、消炎剤、金属封鎖剤、低級アルコール、糖類、アミノ酸類、有機アミン類、合成樹脂エマルジョン、pH調整剤、皮膚栄養剤、ビタミン類、酸化防止剤、酸化防止助剤、香料、及び、常用水などを製造する化粧料の形態、性状に応じて一種乃至は2種以上を選択して用いてよい。

【0010】本発明の化粧料には、化粧剤成分の一部と

して、植物、動物、魚貝類、微生物由来の抽出物たとえば、乳酸菌培養抽出物の抽出物を併用することができる。

【0011】本発明の化粧料に、化粧剤成分として使用し得る粉末成分としては、無機粉末、例えば、タルク、カオリン、各種雲母、炭酸マグネシウム、ケイ酸アルミニウムマグネシウム、ケイ酸・ケイ酸アルミニウム焼結物、ケイ酸ナトリウム、ケイ酸カルシウム、ケイ酸マグネシウム、シリカ、ゼオライト、硫酸バリウム、焼成硫酸カルシウム（焼セッコウ）など等があげられ、有機粉末としては例えば、ナイロン末、ポリエチレン末、ポリスチレン末、セルロース末などが挙げられる。

【0012】本発明化粧料に用いる油脂としては、アボガド油、ツバキ油、グレープシード油、タートル油、マカデミアナッツ油、トウモロコシ油、ミンク油、オリーブ油、ヒマワリ油、ナタネ油、卵黄油、ゴマ油、バージック油、小麦胚芽油、ザザンカ油、ヒマシ油、サフラワー油、綿実油、大豆油、落花生油、チャ実油、コメヌカ油、ホホバ油、米胚芽油が挙げられる。

【0013】本発明の化粧料に用いる固体油脂としては、カカオ脂、ヤシ油、馬油、硬化ヤシ油、バーム油、牛脂、バーム核油、硬化油、モクロウ、硬化ヒマシ油等が挙げられ、またロウ類としては、ミツロウ、キャンデリラロウ、カルナウバロウ、モンタンロウ、コメヌカロウ、ラノリン、酢酸ラノリン、液状ラノリン、サトウキビロウ、ラノリン脂肪酸イソプロビル、ラウリン酸ヘキシル、還元ラノリン等が挙げられる。

【0014】本発明の化粧料に用いる炭化水素としては、流動パラフィン、オゾケライト、スクワラン、ブリストン、パラフィン、セレシン、ワセリン、マイクロクリスタリンワックス等が挙げられる。高級脂肪酸としては、ラウリン酸、ミリスチン酸、バルミチン酸、ステアリン酸、ベヘニン酸、イソステアリン酸、オレイン酸、ウンデシレン酸、トール油脂肪酸、ヤシ油脂肪酸、バーム脂肪酸、リノール酸、リノレイン酸、エイコサペンタエン酸、ドコサヘキサエン酸等が挙げられる。

【0015】本発明の化粧料に用いる合成エステル油としては、ミリスチン酸イソプロビル、オクタン酸セチル、ミリスチン酸オクチルドデシル、バルミチン酸イソプロビル、ステアリン酸ブチル、ラウリン酸ヘキシル、ミリスチン酸ミリスチル、オレイン酸デシル、ジメチルオクタン酸ヘキシルデシル、乳酸セチル、乳酸ミリスチル、酢酸ラノリン、ステアリン酸イソセチル、イソステアリン酸2-ヘキシルデシル、ヒドロキシステアリン酸コレステリル、ジオクタン酸エチレングリコール、ジベンタエリトリット脂肪酸エステル、リンゴ酸ジイソステアリル、ジイソステアリン酸グリセリル、トリオクタン酸トリメチロールプロパン、トリイソステアリン酸トリメチロールプロパン、テトラ-2-エチルヘキサン酸ベンタエリスリット、トリ-2-エチルヘキサン酸グリセ

リル、2-エチルヘキサン酸セチル、バルミチン酸オクチル、トリミリスチン酸グリセリン、トリヘプチルウンデカン酸グリセリル、ヒマシ油脂肪酸メチルエステル、トリ（カブリル・カブリン酸）グリセリン、オレイン酸オレイル等が挙げられる。

【0016】本発明の化粧料に用いるシリコーン類としては、メチルポリシロキサン、オクタメチルトリシロキサン、高重合メチルポリシロキサン、デカメチルポリシロキサン、ドデカメチルポリシロキサンテトラメチルテトラハイドロジェンポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、ジメチルシロキサン・メチル（ポリオキシエチレン）シロキサン共重合体、ジメチルシロキサン・メチル（ポリオキシエチレン）シロキサン・メチル（ポリオキシプロピレン）シロキサン共重合体等が挙げられる。

【0017】本発明の化粧料に用いるアニオン活性剤としては、脂肪酸セッケン、たとえばセッケン用素地、ラウリン酸ナトリウム、バルミチン酸ナトリウム、ヤシ油カリ石ケン液、高級アルキル硫酸エステル塩、たとえばラウリル硫酸ナトリウム、ラウリル硫酸カリウム、ラウリル硫酸トリエタノールアミン；アルキルエーテル硫酸エステル塩、たとえば、POEラウリル硫酸トリエタノールアミン、POEラウリル硫酸ナトリウム；N-アシルアミノ酸塩、たとえば、ラウロイルサルコシンナトリウム、ラウロイルメチル-β-アラニンナトリウム、N-ラウロイルグルタミン酸ナトリウム、N-ステアロイル-L-グルタミン酸二ナトリウム、N-ミリストイル-L-グルタミン酸ナトリウム、N-バルミトイアルアラギン酸ジトリエタノールアミン、高級脂肪酸アミドスルホン酸塩、たとえば、N-ミリストイルメチルタウリンナトリウム、ヤシ脂肪酸メチルタウリンナトリウム、ラウロイルメチルタウリンナトリウム；リン酸エステル塩、たとえば、POEオレイルエーテルリン酸ナトリウム、POEステアリルエーテルリン酸ナトリウム、POEラウリルエーテルリン酸ナトリウム；スルホコハク酸塩、たとえば、スルホコハク酸ジオクチルナトリウム、スルホコハク酸POEラウロイルエタノールアミド二ナトリウム；アルキルベンゼンスルホン酸塩、たとえば、ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム、ドデシルベンゼンスルホン酸トリエタノールアミン、ドデシルベンゼンスルホン酸；高級脂肪酸エステル硫酸エステル塩、たとえば、硬化ヤシ油脂肪酸グリセリル硫酸ナトリウム；ロート油などの硫酸化油、テトラデセンスルホン酸ナトリウム、高級脂肪酸エステルスルホン酸塩、二級アルコール硫酸エステル塩、高級脂肪酸アルキロールアミド硫酸エステル塩、ラウロイルモノエタノールアミドコハク酸ナトリウム、及び、カゼインナトリウム等が挙げられる。

【0018】本発明の化粧料に用いるカチオン性界面活性剤としては、アルキルトリメチルアンモニウム塩、た

とえば、塩化ステアリルトリメチルアンモニウム、塩化ラウリルトリメチルアンモニウム、臭化ラウリルトリメチルアンモニウム；ジアルキルジメチルアンモニウム塩、たとえば塩化ジステアリルジメチルアンモニウム塩；アルキルビリジウム塩、たとえば、塩化セチルビリジウム；アルキルジメチルベンジルアンモニウム塩、塩化ベンゼトニウム、及び、塩化ベンザルコニウム等があげられる。

【0019】本発明の化粧料に用いる両性界面活性剤としては、アルキルベタイン型両性界面活性剤、たとえば、ラウリルジメチルアミノ酢酸ベタイン；アルキルアミドベタイン型両性界面活性剤、たとえば、ウンデシルカルボキシメトキシエチルカルボキシメチルイミダゾリニウムベタインナトリウム、N-ラウロイル-N'-カルボキシメチル-N'-ヒドロキシエチルエチレンジアミンナトリウム、N-ヤシ脂肪酸アシル-N'-カルボキシエチル-N'-ヒドロキシエチルエチレンジアミンナトリウム、ヤシ脂肪酸アミドプロビルベタイン、ラウリン酸アミドプロビルベタイン；スルホベタイン型両性界面活性剤、たとえば、ラウロイルヒドロキシスルホベタイン液；アミンオキサイド型両性界面活性剤、たとえば、ラウリルジメチルアミノキシド液、アミノ酸系両性界面活性剤、たとえば、N-ヤシ油脂肪酸アシル-L-アルギニンエチル・DL-ヒドロキシカルボン酸塩があげられる。

【0020】本発明の化粧料に用いる非イオン界面活性剤としてはグリセリン脂肪酸エステル類、たとえば、モノステアリン酸グリセリル、自己乳化型モノステアリン酸グリセリル、モノイソステアリン酸グリセリル；ポリオキシエチレングリセリン脂肪酸エステル類、たとえば、モノステアリン酸POEグリセリル、モノオレイン酸POEグリセリル、モノイソステアリン酸POEグリセリル；ポリグリセリン脂肪酸エステル類、たとえば、モノステアリン酸ポリグリセリル、トリステアリン酸ポリグリセリル、ペンタステアリン酸デカグリセリル；ソルビタン脂肪酸エステル類、たとえば、モノラウリン酸ソルビタン、モノミリスチン酸ソルビタン、モノバルミチン酸ソルビタン、モノステアリン酸ソルビタン、モノイソステアリン酸ソルビタン、セスキステアリン酸ソルビタン、モノオレイン酸ソルビタン；ポリオキシエチソルビタン脂肪酸エステル類、たとえば、モノステアリン酸POEソルビタン、トリステアリン酸POEソルビタン、トリオレイン酸POEソルビタン；ポリオキシエチレンソルビット脂肪酸エステル類、たとえば、モノラウリン酸POEソルビット、テトラオレイン酸POEソルビット；ポリエチレングリコール脂肪酸エステル類、たとえば、モノラウリン酸ポリエチレングリコール、モノステアリン酸ポリエチレングリコール、ジステアリン酸ポリエチレングリコール；ポリオキシエチレンアルキルエー

テル類、たとえば、POEラウリルエーテル、POEセチルエーテル、POEステアリルエーテル、POEラノリン、POEラノリンアルコール、POEヒマシ油、POE硬化ヒマシ油、POEフィットステロール、POEコレステノールエーテル；脂肪酸アルカノールアミド類、たとえば、ヤシ脂肪酸ジエタノールアミド、ヤシ脂肪酸モノエタノールアミド、ラウリン酸ジエタノールアミド、バーム核油脂肪酸ジエタノールアミド；ボリオキシリエチレンアルカノールアミド類、たとえば、POEラウリン酸モノエタノールアミド、POEヤシ脂肪酸モノエタノールアミド；などが挙げられる。

【0021】本発明の化粧料に用いる保湿剤としては、グリセリン、ジプロピレングリコール、プロピレングリコール、1,3-ブチレングリコール、ソルビトール、乳酸ナトリウム、ビロリドンカルボン酸及びその塩、などが挙げられ、また、水溶性高分子としては、グーガム、クイーンズシード、ベクチン、ゼラチン、キサンタンガム、メチルセルロース、エチルセルロース、ヒドロキシエチルセルロース、ヒドロキシプロビルセルロース、カルボキシメチルセルロース及び塩、アルギン酸、ポリビニルアルコール、カルボキシビニルポマー、ポリアクリル酸ナトリウム、ペントナイト、キチン・キトサン誘導体、ヒアルロン酸及び塩、コラーゲン及びその誘導体などが挙げられる。

【0022】本発明の化粧料に用いる増粘剤としては、ヤシ油脂肪酸モノエタノールアミド、ラウリン酸ジエタノールアミド、ラウリン酸イソプロパノールアミド、ボリオキシエチレンヤシ油脂肪酸モノエタノールアミド、ボリオキシプロピレンヤシ油脂肪酸モノエタノールアミドなどが挙げられる。また、本発明の化粧料に用いる被膜剤としては、ポリビニルアルコール、ポリビニルヒドロキシ、カチオン化セルロース、シリコーンなどが挙げられる。

【0023】本発明の化粧料に用いる紫外線吸収剤としては、オキシベンゾン、ヒドロキシメトキシベンゾフェノンスルホン酸及び塩、ジヒドロキシジメトキシベンゾフェノンなどのベンゾフェノン誘導体、バラアミノ安息香酸、バラアミノ安息香酸エチルなどのバラアミノ安息香酸誘導体、バラメトキシケイ皮酸エチル、バラメトキシケイ皮酸イソプロピル、バラメトキシケイ皮酸2-エチルヘキシル、メトキシケイ皮酸誘導体、サリチル酸オクチル、サリチル酸フェニルなどのサリチル酸誘導体、ウロカニン酸及び誘導体、4-tert-ブチル-4'-メトキシジベンゾイルメタン、2-(ヒドロキシ-5'-メチルフェニル)ベンゾトリアゾール、アントラニル酸メチルなどが挙げられる。

【0024】本発明の化粧料に用いる消炎剤としては、グリチルリチン酸及びその誘導体、グリチルレチン酸及びその誘導体、アラントイン、グアイアズレンなどが挙げられる。また本発明の化粧料に用いる金属封鎖剤とし

ては、エチレンジアミン四酢酸及びナトリウム塩、リン酸、クエン酸、アスコルビン酸、コハク酸、メタリン酸ナトリウム、ヒドロキシエタンジホスホン酸及び塩などが挙げられる。

【0025】本発明の化粧料に用いる低級アルコールとしては、エタノール、プロパンノール、エチレングリコール、ジエチレングリコールなどが挙げられる。糖類としては、ブドウ糖、乳糖、白糖、デンプン、カルボキシメチルデキストラン、シクロデキストリンなどが挙げられる。

【0026】本発明の化粧料に用いるアミノ酸類としては、アスパラギン酸及び塩、アラニン、アルギニン、リジン及び塩、グリシン、シスチン、スレオニン、セリン、メチオニンなどが挙げられる、有機アミン類としては、モノエタノールアミン、ジエタノールアミン、トリエタノールアミン、ジイソプロパノールアミンなどが挙げられる。

【0027】本発明の化粧料に用いる合成樹脂エマルジョンとしては、ポリアクryル酸エステル共重合体、ポリ酢酸ビニルなどが挙げられ、pH調整剤としてはクエン酸、塩酸、リン酸、水酸化ナトリウム、アンモニア、などが挙げられ、皮膚栄養剤としては、ビタミンA、B1、B2、B6、C、E及びその誘導体、バントテン酸及び誘導体、ビオチンなどが挙げられる。

【0028】本発明の化粧料に用いる酸化防止剤としては、ビタミンE、ジブチルヒドロキシトルエン、ブチルヒドロキシアニソール、没食子酸エステル類などが挙げられる。また、酸化防止剤としては、アスコルビン酸、フィチン酸、リノゴ酸などが挙げられるが、配合成分はこれらに限定されるものではない。

【0029】本発明の化粧料は、必須成分であるオリソッドと必要な処理を施した海洋深層水と、化粧料の性状、形態に応じて上記の様々な化粧剤成分の中から選択される少なくとも二以上の成分を用い、常法により所要性状、形態の化粧料に製造される。以下に本発明化粧料の実施例について説明する。

【0030】

【実施例】(実施例1) 化粧水60～70重量%の常用水を基材とし、これに2種類以上の保湿剤0.1～5.0重量%、抗酸化剤、pH調整剤、防腐剤を、夫々に、0.05～5.00重量%、残量を上記のオリソッドと海洋深層水と

して、pH6.0～7.0程度、比重1.000～1.030の全量1.00とする化粧水を常法により製造した。

【0031】上記の本発明化粧水(実施例1)と、前記オリソッドと海洋深層水を含まず他の成分は同じものを使用して常法により調整した化粧水(比較例1)を、それぞれ18歳～55歳の女性10名を被検者として、毎日朝と晩の2回顔に塗布し、10日後に下記の評価基準に従って評価をしてもらった。

評価 内容

- | | |
|----|------------------------|
| 10 | 3 肌のしっとり感、かさつきが改善された |
| | 2 肌のしっとり感、かさつきがやや改善された |
| | 1 使用前と変化なし |

この結果、評価3は実施例の化粧水を使用した被検者が6名、比較例のものは4名、評価2は実施例のものの使用者が3名、比較例が3名、変化なしはそれぞれ1名と2名で、実施例1の化粧水が肌のしっとり感、かさつきを改善する上で、有用性の高いことが示された。

- | | |
|----|---|
| 20 | 【0032】次に、上記実施例1で使用した本発明化粧水の0.03gを試料として、24歳から53歳までの男性19名、女性26名、計45名についてパッチテストを行った。このテストは前記試料0.03gをフィンチャーバー(EPI TEST Ltd. Oy製造)を用いて被検者の上腕屈側部に24時間閉塞貼付を行い、貼付後24時間経過時点で前記試料を除去し、その後1時間、及び、除去後24時間に、それぞれの被膚の状態を観察して判定した。判定は、次のICDRG基準により行った。 |
|----|---|

陰 - ; 反応なし

性 ± ; 紅斑のみ

- | | |
|----|-------------------|
| 30 | 陽 + ; 紅斑、浸潤、時に丘疹 |
| | ++ ; 紅斑、浸潤、丘発、小水疱 |
| | 性 +++ ; 大水疱 |

【0033】テストの結果、被検者45名は、いずれも試料除去後1時間の反応はすべて陰性であった。また、試料除去後24時間の反応もすべて陰性で異常は認められなかった。

【0034】(実施例2) UVベースクリーム(W/O型クリーム)表1に示すUVベースクリームを調製し、その保湿感を調べた。

【表1】

成 分 名	実施例 2	比較例 2
	配合率	配合率
(1)スクワラン	14.00	14.00
(2)ジ-2-エチルヘキサン酸ネオペチルグリコール	3.00	3.00
(3)デカメチルシロキサン	20.00	20.00
(4)パラオキシ安息香酸エステル	0.10	0.10
(5)微粒子酸化チタン	5.00	5.00
(6)酸化亜鉛	6.00	6.00
(7)精製水	残量	残量
(8)海洋深層水	31.00	—
(9)オリソッド	4.00	—
評価	良好	普通

【0035】(製 法)

- A ; 成分(1)～(6)を混合し、70℃に加温する。
 B ; 成分(7)～(9)を混合し、70℃に加温する。
 C ; AとBを混合して乳化後、冷却して実施例2のUVベースクリームを得た。
 比較例2は、実施例2の成分(8), (9)を、すべて成分(7)の精製水とするもので、上記と同処方により製造した。

【0036】(評 値) 実施例2のクリームと比較例2 20 のクリームを20才～52才の女性10名に、昼間の外*

* 出時に10日間塗布してもらい使用後の肌のつっぱり感と保湿感について評価してもらったところ、本発明クリームは8名の者が肌のつっぱり感がなく保湿性が良好であると回答したが、比較例では良好な保湿感を覚えたと回答した者は5名であった。このことから本発明UVベースクリームは比較例2のクリームに比べつっぱり感が少なく保湿性が良好であることが判った。

【0037】(実施例3) 白色ジェル状クリーム

【表2】

成 分 名	実施例 3	比較例 3
	配合率	配合率
(1)ジプロピレングリコール	7.00	7.00
(2)濃グリセリン	4.00	4.00
(3)カルボキシビニルポリマー	0.40	0.40
(4)パラオキシ安息香酸エステル	0.20	0.20
(5)精製水	残量	残量
(6)海洋深層水	6.00	—
(7)水酸化ナトリウム	0.20	0.20
(8)ポリオキシエチレンヤシ油脂肪酸グリセリン	1.00	1.00
(9)イソノナン酸イソノニル	8.00	8.00
(10)フェノキシエタノール	0.60	0.60
(11)オリソッド	5.00	—
評価	良好	普通

【0038】(製 法)

- A ; 成分(1)～(6)を混合して70℃まで加温する。
 B ; 成分(8)～(10)を混合して70℃まで加温する。
 C ; Aに成分(7)を加える。
 D ; CにBを加え、乳化後冷却して成分(11)を加え実施例3の白色ジェル状クリームを得た。
 比較例3では、成分(6)と(11)を使用せず、その分を成分(5)の精製水として実施例3と同じ処方により白色ジ

エル状クリームを得た。

【0039】(評 値) このクリームも実施例2の場合と同じ構成の被験者によるテストを行った結果、実施例3、比較例3のクリームとも実施例2の場合と変わらない評価であった。

40 【0040】(実施例4) ローション(無色透明の液体)

【表3】

成 分 名	実施例4	比較例4
	配合率	配合率
(1) 1,3-ブチレングリコール	2.00	2.00
(2) パラオキシ安息香酸エステル	0.20	0.20
(3) 精製水	残量	残量
(4) 海洋深層水	95.00	—
(5) クエン酸	0.04	0.04
(6) クエン酸Na	0.40	0.40
(7) オリソッド	1.50	—
評価	良好	普通

【0041】(製法)

A: 実施例4は成分(1)～(7)を混合して実施例4のローションを得た。比較例4は、成分(4), (7)を使用せず、その分は成分(3)の精製水とした。

【0042】(評価) この実施例4と比較例4のローションを18才～49才の女性10名に、毎日、朝、晩2回、3ヶ月に亘って適量を顔に塗布してもらい、肌の美白効果、並びに、皮膚の老化防止効果の評価をした。評価は次の評価基準によった。

<美白効果>

- 3 肌のくすみが改善され、明るくなった
2 肌のくすみが改善され、目立たなくなったり
1 変化なし

<老化防止効果>

評価方法

- * 3 肌のはりが改善された
2 肌のはりがやや改善された
1 変化なし

評価の結果、美白効果については、評価3は実施例4のローションを使用した者が4名、比較例4では2名、評価2は実施例4では5名、比較例4は3名、評価1は実施例4が1名であったが、比較例4では5名であった。また、老化防止効果については、評価3が実施例4が5名、比較例4は3名、評価2は実施例4は4名、比較例4では3名、評価1は実施例4では1名、比較例4では4名であった。このことから本発明ローションは、肌の美白効果、皮膚の老化防止効果のいずれにおいても、従来品より有意であることが判る。

【0043】(実施例5) ミルク(白色～微褐色の乳液)

* 【表4】

成 分 名	実施例5	比較例5
	配合率	配合率
(1) イソステアリルアルコール	10.00	10.00
(2) スクワラン	5.00	5.00
(3) モノステアリン酸プロピレングリコール	4.00	4.00
(4) ジプロピレングリコール	10.00	10.00
(5) 精製水	残量	残量
(6) パラオキシ安息香酸エステル	0.20	0.20
(7) 海洋深層水	10.00	—
(8) オリソッド	0.50	—
評価	良好	普通

【0044】(製法)

A: 成分(1)～(3)を混合後、80℃まで加温する。

B: 成分(4)～(7)を混合後、80℃まで加温する。

<美白効果>

- 評価方法
40 3 肌のくすみが改善され、明るくなったり
2 肌のくすみが改善され、目立たなくなったり
1 変化なし

C: BにAを加え乳化後、冷却する。

D: Cに成分(8)を加えて、実施例5の乳液を得た。

比較例5は、成分(7), (8)を用いないで、残量はすべて成分(5)の精製水とし、上記Cの冷却のあと比較例5の乳液を得た。

【0045】(評価) 実施例5と比較例5の乳液を18才～52才の女性10名に、毎日、朝と晩の2回、3ヶ月に亘って顔に適量を塗布してもらい、肌の美白効果、並びに、皮膚の老化防止効果についての評価をした。評価は次の基準によった。

<老化防止効果>

- 評価方法
3 肌のはりが改善された
2 肌のはりがやや改善された
1 変化なし
評価の結果、美白効果については、評価3は実施例4のローションを使用した者が4名、比較例4では2名、評価2は実施例4では5名、比較例4は3名、評価1は実施

例4が1名であったが、比較例では5名であった。また、老化防止効果については、評価3が実施例4が5名、比較例4は3名、評価2は実施例4は4名、比較例4では3名、評価1は実施例4では1名、比較例4では4名であった。のことから本発明ローションは、肌の*

* 美白効果、皮膚の老化防止効果のいずれにおいても、従来品より有意であることが判る。

【0046】(実施例6) 育毛剤(無色透明の液体)

【表5】

成 分 名	実施例6 配合率	比較例6 配合率
(1) 95%エタノール	50.00	50.00
(2) 1-メントール	0.10	0.10
(3) 香料	0.10	0.10
(4) ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油	2.00	2.00
(5) 精製水	残量	残量
(6) 海洋深層水	20.00	—
(7) オリソッド	1.00	—
評価	良好	普通

【0047】(製 法)

A ; 成分(1)~(4)を均一に混合する。

B ; Aに成分(5)~(7)を加え実施例6の育毛剤を得た。

比較例6は、成分(1)~(4)を均一に混合して残量を全て精製水として比較例6育毛剤を得た。

※ き感を感じるか、髪がべつつかないか否かによった。この結果、本発明育毛剤は、頭皮のごわつき感、髪のべつきとも感じないと評価した者が8名であったが、比較例では5名であった。

20 【0049】(実施例7) ハンドクリーム(O/W型クリーム)

【表6】

【0048】(評 値) 実施例6と比較例6の育毛剤

を、30才~52才の男性10名に、一日1回、10日間使用してもらい評価を調べた。評価は、頭皮のごわつき

成 分 名	実施例7 配合率	比較例7 配合率
(1) ステアリン酸	10.00	10.00
(2) モノオレイン酸ポリオキシエチレンソルビタン(20E.O.)	6.00	6.00
(3) パルミチン酸イソプロピル	5.00	5.00
(4) フェノキシエタノール	0.50	0.50
(5) 精製水	残量	残量
(6) 漂白セリシン	10.00	10.00
(7) 海洋深層水	10.00	—
(8) オリソッド	3.00	—
評価	良好	普通

【0050】(製 法)

A ; 成分(1)~(4)を混合後、85℃まで加温する。

B ; 成分(5)~(8)を混合後、85℃まで加温する。

C ; BにAを加え、乳化後冷却して実施例7のハンドクリームを得た。なお、比較例7は、成分(7), (8)を使用せず、その分を成分(5)の精製水とし、成分(1)~(4)と成分(5), (6)を上記実施例7と同様に処方して得たハンドクリームである。

【0051】(評 値) 実施例7と比較例7のハンドクリームを18才~54才の女性10名に、1日2回、1

0日間試用してもらい、手の肌のかさつき感が無くしつとり感が得られるかどうかを評価してもらった。この結果、本発明ハンドクリームは手の肌のかさつき感が取れ、しつとり感が得られた者が8名で、良好であったのに対し、比較例では良好な使用感を覚えた者は5名で普通であった。

40 【0052】(実施例8) 洗顔ソープ(白色クリーム状)

【表7】

成 分 名	実施例 8	比較例 8
	配合率	配合率
(1) ミリスチン酸	10.00	10.00
(2) ステアリン酸	7.00	7.00
(3) ラウリン酸	6.00	6.00
(4) ポリオキシエチレンステアリルアルコール	1.00	1.00
(5) ヒドロキシエタンジホスホン酸	0.05	0.05
(6) フェノキシエタノール	0.50	0.50
(7) 精製水	残量	残量
(8) パラグリセリン	10.00	10.00
(9) 水酸化カリウム	6.00	6.00
(10) 海洋深層水	1.00	—
(11) オリソッド	0.50	—
評価	良好	普通

【0053】(製 法)

A ; 成分(1)～(6)を混合後、85℃まで加温する。

B ; 成分(7)～(11)を混合後、85℃まで加温する。

C ; AにBを加え、けん化後、冷却して実施例8の洗浄剤(洗顔ソープ)を得た。

比較例8は、成分(10), (11)を使用せず、その分を成分

(7)の精製水として実施例と同じ処方で洗顔ソープとし 20 たものである。

【0054】(評 値) 実施例8, 比較例8の洗顔ソープ*

* ブを18才～53才の女性10名に、一日朝、夕の2回、10日間使用してもらい、洗顔後の肌のつっぱり感としつとり感を評価してもらった。この結果、本発明洗顔ソープは、肌のつっぱり感はなく、しつとり感を覚えた者が8名であったが、同様の回答は比較例では4名であった。

【0055】(実施例9) シャンプー(白色パール状の液体で芳香を有するもの)

【表8】

成 分 名	実施例 9	比較例 9
	配合率	配合率
(1) ラウリン酸アミドプロピルベタイン液	40.00	40.00
(2) ヤシ油脂肪酸ジエタノールアミド	10.00	10.00
(3) パラオキシ安息香酸エステル	0.50	0.50
(4) 精製水	残量	残量
(5) 海洋深層水	20.00	—
(6) オリソッド	5.00	—
(7) 香料	0.40	0.40
評価	良好	普通

【0056】(製 法)

A ; 成分(1)～(5)を混合後、75℃まで加温することで、混合溶解させ、冷却した。

B ; Aに成分(6)及び(7)を加え、実施例9のシャンプーを得た。比較例9は成分(5), (6)を使用せず、この分を成分(4)の精製水として、実施例9と同じ処方によって得たシャンプーである。

【0057】(評 値) 実施例9と比較例9のシャンプー 40 一を、18才～52才の女性10名に一日1回、10日※

※間使用してもらい頭皮地肌のかさ付き感、髪のバサつき感の有無を調べた。この結果、本発明シャンプーでは地肌のかさ付き及び髪のバサつきを覚えた者は1名であったのに対し、比較例では4名が肌のかさ付き、髪のバサ付きを覚えたと回答した。

【0058】(実施例10) パック(粘性のあるペースト状)

成 分 名	実施例 10	比較例 10
	配合率	配合率
(1) 精製水	残量	残量
(2) パラオキシ安息香酸エステル	0.20	0.20
(3) カオリン	10.00	10.00
(4) ベントナイト	15.00	15.00
(5) 海洋深層水	20.00	—
(6) オリソッド	5.00	—
評価	良好	普通

【0059】(製法)

A : 成分(1)と(2)を混合後、75°Cまで加温する。

B : Aに成分(3)～(6)を加え混合後、均一に分散させ、冷却して実施例10のパックを得た。

比較例10のパックは、成分(5)、(6)を使用せず、その分を成分(1)の精製水として上記と同じ処方で得たものである。

【0060】(評価) 実施例10と比較例10のパックを22才～56才の女性10名に一日1回、10日間使用*

*してもらい、使用後の肌のかさつき感としっとり感を調べた。この結果、本発明パックは、肌のしっとり感を覚えるがかさつき感はない回答した者が9名であったのに対し、同じ回答は比較例10のパックでは4名であった。

【0061】(実施例11) リンス(乳白色、高粘性の液体)

【表10】

成 分 名	実施例11	比較例11
配合率	配合率	
(1)モノステアリン酸プロピレングリコール	2.50	2.50
(2)ホホバ油	1.00	1.00
(3)硫酸ラリル脂肪酸アミノアビメチルメチルモニウム(2)	5.00	5.00
(4)精製水	残量	残量
(5)海洋深層水	10.00	—
(6)塩化0-(ヒドロキシ-3-(トリメチルモニウム)アビメチルヒドロキシエチル)-ス	0.50	0.50
(7)1,3-ブチレングリコール	5.00	5.00
(8)香料	0.30	0.30
(9)オリソッド	1.00	—
評価	良好	普通

【0062】(製法)

A : 成分(1)～(3)を混合後、75°Cまで加温する。

B : 成分(4)～(7)を混合後、75°Cまで加温する。

C : BにAを加えて乳化後、冷却する。

D : Cに成分(8)、(9)を加えて、実施例11のリンスを得た。比較例11は、成分(5)と(9)を使用せず、その分を成分(4)の精製水でまかない、実施例と同様の処方で得たリンスである。

【0063】(評価) 実施例11と比較例11のリンス *

*を、18才～52才の女性10名に一日1回、10日間使用してもらい、頭皮地肌のしっとり感、髪のしっとり感について調査した。この結果、本発明リンスは、地肌のしっとり感、髪のしっとり感を覚えたが9名であったのに対し、比較例では5名であった。

【0064】(実施例12) ファンデーション(微褐色の軟クリーム状)

【表11】

成 分 名	実施例12	比較例12
配合率	配合率	
(1)デカメチルシクロヘキサシロキサン	20.00	20.00
(2)酸化チタン	8.00	8.00
(3)黄酸化鉄	1.00	1.00
(4)ベンガラ	0.20	0.20
(5)黒酸化鉄	0.10	0.10
(6)トリ2-エチルヘキサン酸グリセリル	3.00	3.00
(7)ポリオキシエチレン・メチルポリシロキサン共重合体	1.00	1.00
(8)バラオキシ安息香酸エステル	0.30	0.30
(9)精製水	残量	残量
(10)海洋深層水	10.00	—
(11)オリソッド	2.00	—
評価	良好	普通

【0065】(製法)

A : 成分(1)～(5)を3本ローラで混練する。

B : Aに成分(6)～(8)を加え、75°Cまで加温する。

C : 成分(9)～(11)を混練し、75°Cまで加温する。

D : BにCを加えて乳化後、冷却して実施例のファンデーションを得た。比較例12は、実施例12のA、Bと同じ成分を同じ処方を行い、成分(10)、(11)を使用せずに成分(9)の配合割合を増した成分(9)を75°Cまで加温して

Bに加え、実施例12のDと同じ処方により比較例12のファンデーションを得た。

【0066】(評価) 実施例12と比較例12のファンデーションを、21才～56才の女性10名に、一日1回、10日間使用してもらい、その使用感を調べた。この結果、本発明ファンデーションでは、使用後の肌のしっとり感を覚えた者が9名であったのに対し、比較例では5名であった。

【0067】以上の本発明の各実施例において、使用するオリーブ葉エキスとローズマリー葉エキスのグリコール移抽液（オリソッド）を0.1～5.0重量%としたのは、0.1重量%未満であると十分な保湿作用、抗酸化作用が得にくく、また、5.0重量%より多くてもその効果が泡和して有意差がないからである。また、使用する海洋深層水も1.0重量%未満では十分なミネラルが得られず、また、95.0重量%より多いと、化粧料として必要な他の成分などの添加が制約されるためである。

【0068】

*10

* 【発明の効果】以上より明らかなように、本発明化粧料は、オリーブ葉エキスとローズマリー葉エキスの移抽液（オリソッド）が持つ人の肌の保湿効能、並びに、海洋深層水の持つ人の肌の保湿効能が相乗的に作用して、既製化粧水等の化粧料に比べて大きい有意差のある保湿性を発現し、また、前記エキス移抽液の持つ抗酸化作用が海洋深層水が持つ保湿作用と協働して肌のかさつきを防ぐことができるので、肌の老化の進行を遅らせ、肌の酸化トラブルを防ぎ、ダメージを受けた肌の回復を効果的に図ることができる化粧料としてきわめて有用である。

フロントページの続き

F ターム(参考) 4C083 AA111 AA112 AA161 AA162
 AB032 AB212 AB232 AB242
 AB442 AC022 AC092 AC102
AC111 AC112 AC122 AC152
 AC182 AC242 AC302 AC352
 AC392 AC422 AC432 AC482
 AC642 AC712 AC782 AC892
 AD042 AD092 AD152 AD162
 CC04 CC05 CC07 CC12 CC19
 CC24 CC37 CC38 CC39 DD32
 DD33 DD41 EE12 EE17 FF05